中国語の可能形式“能”“会”“可以”
―「可能」概念を構成する力に着目した分析―

大　江　元　貴

1．はじめに

本稿では，中国語の可能を表す3つの助動詞“能（néng）”“会（huì）”“可以（kěyǐ）”をとりあげ，その異同について分析を行う[1 2]．現代共通日本語では可能の意味の違いを形式で表し分けることが基本的にはない（渋谷 1993）ことを考えると，中国語で3つの形式が可能を表す上で競合関係にあるという事実は，非常に興味深い[3]．“能”“会”“可以”の異同については，これまで膨大な研究の蓄積があり，記述的には多くの事実が明らかになっている．しかし，使用の際におけるニュアンスの違いなど細部にわたる記述が積み重ねられてきた一方で，3つの可能形式がどのような原理で意味のすみわけをしているのか，中国語のこれら3つの可能形式の異同を記述することによって「可能」概念を理解する上でどのような示唆が得られるのか，といった理論的な分析は多くない．本稿はこのような問題意識の下，中国語学，日本語学，一般言語学の知見を参照しながら中国語の“能”“会”“可以”の分析を行う中で，3つの可能形式の異同を統一的に説明できる枠組みを提案し，「可能」概念を捉えるための新たな視点を示す.

2. 先行研究

2節では，「可能」，および“能”“会”“可以”という形式間の異同を議論する上で，何が課題として残されているのかを整理する。まず，2.1節で，Palmer（2001）のモダリティの分類に基づき，本稿の分析で用いる「可能」の分類を示す。その上で，モダリティ研究で用いられている分類の観点だけでは，中国語の3つの可能形式の異同が十分に捉えられず，分類の観点をより精緻化する必要があることを指摘する。つづいて，2.2節で，“能”“会”“可以”に関して分析を行っている研究を概観し，先行研究の到達点と残された課題を提示する。

2.1. モダリティ研究から見た「可能」の意味分類

「可能」は，一般言語学的には事柄の現実性（事実性）に関わるカテゴリーであるモダリティの分野で議論されることが多い．モダリティの分類に関しては様々な立場があるが，本稿では，モダリティ研究の中で広く採用されているPalmer（2001）のモダリティ分類を主に参照しながら可能形式が表す意味を整理したい．Palmer（2001）はモダリティをdynamic modality（動的モダリティ），deontic modality（拘束的モダリティ），epistemic modality（認識的モダリティ），evidential modality（証拠性モダリティ）の4つに分類している．可能形式が関わるのはevidential modalityを除いた前の3つである．中国語の“能”を用いた（1）～（4）の例を基に，それぞれのモダリティについて簡単に説明する[4][5]．

（1） 我们 今天 能 做 的 事，有 许多 是 过去 做不到 的.
私達 今日 NENG する SP 事 ある 多い COP 過去 する-NEG-達する のもの
「今日私たちができることの中には，過去にはできなかったものが多くある.」

（2） 因为 缺 教员，暂时 还 不 能 开课.
～なので 足りない 教員 しばらく まだ NEG NENG 開講する
「教員が足りないので，まだしばらくは開講できない.」

（3） 这儿 能 不 能 抽烟？－那儿 可以 抽烟， 这儿 不 能.
ここ NENG NEG NENG 喫煙する あそこ KEYI 喫煙する ここ NEG NENG
「ここでたばこを吸ってもいいですか．－あそこはいいですが，ここはだめです.」

（4） 这 件 事 他 能 不 知道 吗？
これ CL 事 彼 NENG NEG 知っている SFP（疑問）
「このことを彼が知らないはずがないだろう.」

（吕叔湘 1999: 414－415）

dynamic modalityは，典型的には主語の内部条件に関わる意味を表す．（1）のような主語の「身体的・精神的な力」による可能（能力）を表すものが基

本であるが,「教員が足りない」といった行為主体をとりまく状況の条件に関わる可能を表す（2）のようなものもdynamic modalityに含まれる.（1）と（2）の違いは，可能になる条件が行為主体（主語）の内部にあるのか外部にあるのかによる違いである．Palmer（2001）とは一部異なるモダリティ分類を提案しているBybee et al.（1994），van der Auwera & Plungian（1998）などの研究においても，dynamic modalityを内部条件が関わるのか外部条件が関わるのかという観点から2つに分けるという見解は一致している．この区別は日本語学の中で用いられている「能力可能」と「状況可能」という用語（渋谷2005）が表す違いにほぼ相当するので，本稿では（1）のような行為主体の内部条件による可能を「能力可能」,（2）のような外部条件による可能を「状況可能」と呼ぶことにする．deontic modalityは，義務や許可など，主語に立つ行為主体の行為を何らかの意味で拘束するものである.（3）がこれにあたり,「可能」の場合,「たばこを吸ってもいい」という「許可」や，その否定である「禁止」という意味になって現れる．この「許可」や「禁止」の意味を本稿ではまとめて,「許可可能」と呼ぶことにする.

dynamic modalityとdeontic modalityが事態参与者のあり方に関わる意味を表す（event modality）のに対して，epistemic modalityは命題の現実性（事実性）に対する話し手の態度を表す（propositional modality).（4）が，epistemic modalityを表している例であり,「このことを彼が知らない」ということの現実性を否定する話し手の判断が“能”によって表されている．本稿ではepistemic modalityを担う可能の意味を「認識可能」と呼ぶ．以下の表1が，モダリティの分類とそれに対応する可能の分類をまとめたものである.

表1　モダリティの分類と可能の意味分類の対応

event modality			propositional modality
dynamic modality		deontic modality	epistemic modality
能力可能（1）	状況可能（2）	許可可能（3）	認識可能（4）
行為主体の内部条件による可能を表す	行為主体の外部条件による可能を表す	行為主体に対する許可や禁止を表す	命題の現実性についての話し手の認識的態度を表す

許可可能と認識可能が行為主体に対する拘束的意味や話し手の認識的態度といった他の用法と区別しやすい意味を持つのに対して，能力可能と状況可能を分ける「内部条件か外部条件か」という基準は，その判断が難しいことがある.

（5）は彼の能力という内部条件によって「泳ぐ」という行為が可能であることを表す典型的な能力可能の例であり，（6）は「用事がない」という外部条件によって「会議に参加する」という行為が可能であることを表す典型的な状況可能の例である．（5），（6）から，能力可能は“能”“会”“可以”のいずれでも表せるのに対して，状況可能は“能”と“可以”のみが使用できる（“会”は使用できない）ことがわかる．

（5） 他 {能/会/可以} 游泳.
彼 NENG/HUI/KEYI 泳ぐ
「彼は泳げる.」

（6） 今天 没 有 事，我 {能/*会/可以} 参加 那 个 会议.
今日 NEG ある 事 私 NENG/HUI/KEYI 参加する それ CL 会議
「今日は用事がないので，その会議に参加できる.」

このように，典型的な能力可能，状況可能の場合は条件が内部にあるのか外部にあるのかの判断は問題にならないが，以下の（7）と（8）のような例になると，複数の見方がありうる．

（7） 他 腿 伤 治好 了，{能/*会/可以} 走路 了.
彼 足 傷 治る-良い PERF NENG/HUI/KEYI 歩く SFP（変化）
「彼は足が良くなって，歩けるようになった.」

（8） 因为 太 害羞 了， 所以 我 不 {能/*会/*可以}
～なので すぎる 恥ずかしい SFP（変化） したがって 私 NEG NENG/HUI/KEYI
说 这 件 事.
話す これ CL 事
「恥ずかしくて私はそんなこと言えない.」

（7）は「彼」の足の傷の状態が良くなったという身体的な条件によって「歩く」という行為が可能になったこと，（8）は「私」の恥ずかしい気持ちという心情の条件によって「そのことを話す」という行為が不可能であることを表している（「心情可能」渋谷 1993，2005）．1つの見方として，「足の傷」や「心

情」はいずれも行為主体の内部にあるとみなせるので，どちらも能力可能を表している例と分析できるかもしれない．別の見方としては，「足の傷」も「心情」も主体に恒常的に内在する条件ではなく，一時的なものなので，いずれも外部条件による状況可能を表していると分析することもできるだろう．実際，（7）は状況可能と同じふるまいを見せるので（“能”“可以”のみが使用可），後者の見方でよいかもしれないが，（8）は典型的な能力可能とも状況可能とも異なるふるまいを見せる（“能”のみが使用可）．このように，（7）や（8）のような例について考えていくと，内部条件とは何か，外部条件とは何かということが問題になってくるが，このような点に関する詳細な議論は既存のモダリティ研究ではなされていない．モダリティという関心から可能を見た場合，話し手の判断や他者への拘束的な意味を持つ認識可能や許可可能が議論の中心になり，dynamic modalityにあたる能力可能，状況可能はモダリティの中ではむしろ周辺的な存在であるので，能力可能と状況可能の違いにあまり関心が払われてこなかったのはやむを得ないところもある．しかし，可能の意味を担う形式の状況を見ると，中国語の“能”と“可以”（Li, Renzhi 2004），さらに英語のcan（Sweetser 1990，Palmer 2001）や日本語の「(rar) eru」（渋谷 2005）など，多くの形式が認識可能の意味を十分に発達させていない．可能では，むしろdynamic modalityの意味が中心になることが多く，中国語の可能形式の異同を捉える上でも，能力可能と状況可能の違いに関わる内部条件，外部条件に関する記述をより精緻にする必要がある．したがって以下では，「可能」概念の意味において中心的意味である（が，十分に議論が尽くされていない）能力可能と状況可能を中心に議論を進める．なお許可可能については，4.2節で詳しく述べるが，状況可能に準じる分析ができると考える．

2.2 “能”“会”“可以”に関する分析

つづいて，“能”“会”“可以”について分析している先行研究を見る．この３つの可能形式については，非常に多くの研究で様々な現象が指摘されているが，現象の羅列ではなく“能”“会”“可以”の異同を統一的に捉えられるような枠組みで説明した研究はそれほど多くない．教学上は，“能”は「能力があってできる」，“会”は「技能を習得してできる」，“可以”は「許可や条件によってできる」という，それぞれの形式が典型的に表す意味を提示するという方法がしばしばとられる（荒川 1986，相原ほか 1987，讃井 1996）．“能”と“会”は能力可能，“可以”は状況可能と許可可能の意味を中心に表すので，こ

のような方法は3形式のおおまかな分布を把握する上では確かに有効である．しかし，それぞれの形式が典型的に表す意味を提示するだけでは，2つ（以上）の形式がいずれも使える場合の意味の違いや，ある条件下で特定の形式の使用が制限されることが説明しにくい．例えば，状況可能と許可可能を表すときには“可以”が用いられることが強調されるが，2.1節の（2），（3）で示したように“能”も状況可能と許可可能を表すことができる．「許可や条件によってできる」ことを表す（2）や（3）で，なぜ“能”も使用可能なのか，“能”を用いた場合と“可以”を用いた場合でどのような意味の違いがあるのか，という問いに対しては，典型的な意味を提示するだけでは当然説明が与えられない．複数の可能の意味にまたがる“能”“会”“可以”の異同をできるだけ統一的に説明しようとすると，これらの形式が表す中核的意味を仮定し，そこから説明を与えるというアプローチをとることになる．このようなアプローチから分析している研究として注目されるのが，黄麗華（1995），鲁晓琨（2004），侯瑞芬（2009）である．

黄麗華（1995），鲁晓琨（2004），侯瑞芬（2009）はそれぞれ独自の観点から“能”“会”“可以”を分析した研究であるが，指摘している言語現象は重なるものが多く，また様々な現象を統一的に説明できるように3つの形式の中核的意味を抽象的に規定しているので，結果として類似した記述になっている．3つの研究の“能”“会”“可以”に対する記述を以下に示す．

黄麗華（1995）

“能”　：「達成」状況が一定のレベルにまで達する．

“会”　：「自発」ことがらがごく自然に成立する．

“可以”：「許容」ことがらが許容範囲内におさまる．

鲁晓琨（2004）[6]

“能”　：NPがVPを実現する条件を備えている（我们说“能”的语义是表示“NP具有实现VP的条件”）．

“会”　：動作主の技能（技量）を表す（“会 1”表示施事的本领）．

“可以”：VPの実現がNPの条件の許容範囲に入ることを表す（“可以 1”表示VP的实现能够进入NP条件容许范围）．/ある状況（NP＋VP）が情理上の許容範囲あるいは話し手の許容範囲に入ることを表す（“可以 2”表示某种情况（NP＋VP）能够进入情理的容许范围或说话人的容许范围）．

侯瑞芬（2009）

“能”　：力と障害の両方の意味を兼ね備えており，主体が障害を克服する能力を表す（“能”兼有力量与障碍两种语义，表示主体克服障碍的能力）.

“会”　：主体が行う行為の内在的な力を強調している（“会”强调主体实施行为的内在力量）.

“可以”：外部の障害の消失を強調している（“可以”强调外部障碍的消失）.

細部では異なる部分があるものの“能”は主体が「達成」や「克服」をするさま，“会”は主体の「内在的な力（属性）」，“可以”は「障害の不在」によって「許容」されるさまにそれぞれ意味の重点があるという見解でおおむね一致している．以下，それぞれの形式の意味特徴を反映している事例を簡単に見ておく．

（9）のように，能力の具体的な程度の高さが示されるときには“能”が最も自然になる．これは，行為が一定程度に「達する」，障害を「克服」するといった意味に重点がある“能”の特徴の反映とされる．

（9）　张三　一小时　能　打　一千多　字.
　　張三　一時間　NENG　打つ　千余り　字
　　「張三は一時間に1000字あまり打てる.」　（黄麗華 1995: 84）

逆に“会”の特徴（内在的な力（属性）を表す）を示しているとされるのが，以下の（10）の例である．（10）のように，生得的な能力で，“自然に習得され，特別な努力なしにおこなうことができる動作”（黄麗華 1995: 84）を表す場合には専ら“会”が用いられることになる．

（10）　老鼠　生来　{??能／会}　打洞.
　　ネズミ　生まれつき　NENG/HUI　穴を掘る
　　「ネズミは生まれながらにして穴を掘ることができる.」
　　（黄麗華 1995: 84）

“能”が「達成」や「克服」といった「積極性」（“积极性”）を持つのに対して，“可以”は「消極性」（“消极性”）という特徴を持つとされる．例えば，（11）

の例で，「広告を描けるか？」という問いに対して，単に「描ける」と答える場合には，“能”も“可以”も使えるが，「描けるけど，あまり上手くない」というように，控えめに答えるときには，“可以”のみが自然になる．

(11) 你 能 画 广告吗？
あなた NENG 描く 広告 SFP（疑問）
「あなたは広告を描けますか．」
ー我 {能／可以} 画．
私 NENG/KEYI 描く
「描けます．」
ー我 {＊能／可以} 画，但 画不好．
私 NENG/KEYI 描く しかし 描く-NEG-良い
「描けますけど，あまり上手くありません．」 （鲁晓琨 2004: 89）

このような現象は，“可以”が行為の実現を促す方の条件ではなく，「実現を妨げるものがないからできる」という実現を妨げる方の条件（の不在）に重点を置いていることの反映であるとされる．

黄麗華（1995），鲁晓琨（2004），侯瑞芬（2009）の研究は，現象の羅列や典型的意味の提示という段階から一歩進み，“能”“会”“可以”に関する諸現象に統一的な「説明」を与えようとしている点で高く評価できる．実際，かなりの程度それに成功しているが，残された課題もある．具体的に未解決の課題を 2 つ指摘する．

1 つは，“会”が使用できなくなる要因に対する説明の問題である．(12) は，先に紹介した具体的な達成度を表す場合であり，黄麗華（1995）をはじめとして多くの研究で，このような場合“会”が不自然になることを指摘している（相原ほか 1987，讃井 1996，吕叔湘 1999）．このように，「達成」「克服」といった“能”の意味特徴がよく反映された可能を表す場合には“会”は用いられにくいとされている．

(12) 张三 一小时 {能／＊会} 打 一千多 字．
張三 一時間 NENG/HUI 打つ 千余り 字
「張三は 1 時間に 1000 字あまり打てる．」

(12) とは別種の現象として，侯瑞芬（2009）が，(13) の“背＋出”（暗唱する＋出る）という「動詞＋（方向）補語」の形をとる場合には“会”が用いられないことを指摘し，これは“会”の「恒常性」という特徴に違反するためであると説明している．

(13)　他　一口气　{能/*会/可以}　背 出　　我们　的　历史　大系.
　　彼　すらすら　NENG/HUI/KEYI　暗誦する-出る　私達　SP　歴史　大系
　「彼は我々の歴史大系をすらすら暗唱することができる．」
　（侯瑞芬 2009: 279）

まず (13) に対する侯瑞芬（2009）の恒常性の観点からの説明について検討する．“会”が補語と共起すると不自然になるという事実は渡辺（2000）など他の研究も指摘するところであり，記述として正しい．また，“会”が状況可能を表せないという事実（cf.（6））に対しては恒常性という観点からの説明が成り立つであろう．しかし，(13) は「彼」の恒常的能力を述べる能力可能を表していると解釈できる例であり，恒常性の制約には違反していないはずである．(13) で“会”が不自然になる事実を，補語と共起していることを理由に恒常性という観点から説明するのは適切ではない．つづいて，(12) に対する「達成」「克服」という“能”の意味特徴からの説明について考える．このような説明では，行為が一定程度のレベルに到達していること，通常は難しいような行為を達成しうることを表しているにもかかわらず，“会”が自然に成立する (14) や (15) のような例の存在が問題になる．

(14)　四 岁　的　孩子　会　写　三千　个　汉字.
　　四歳　SP　子供　HUI　書く　三千　CL　漢字
　「4 歳の子供は 3000 個の漢字が書ける．」　（陆庆和 2006: 142）

(15)　他　会　闭　着　眼　打　字.
　　彼　HUI　閉じる　CON　目　打つ　字
　「彼は眼を閉じてタイプすることができる．」

(12) と (14)，(15) の違いを「達成」や「克服」のあり方の違いから説明することは困難であり，意味的な観点だけから“会”の使用可否を説明するの

には限界がある．本稿では（12）と（13）は同じ原理によって“会”が不自然になっていると考えるが，これを説明するには「達成」や「恒常性」といった意味の面だけでなく文法構造にも注意する必要があることを 4 節で主張する．

先行研究におけるもう 1 つの課題を，2.1 節で述べた問題との関係から指摘する．黄麗華（1995），鲁晓琨（2004），侯瑞芬（2009）のそれぞれの記述の観点を見ると，黄麗華（1995），鲁晓琨（2004）が各形式の中核的意味を，「達成」「自発」「許容」，あるいは「条件」「動作主の技量」「許容範囲」という個々の意味特徴を反映したキーワードで捉えようとしているのに対して，侯瑞芬（2009）はSweetser（1990）の英語の法助動詞の分析を基に，「力」と「障害」という道具立てだけから説明している点が注目される．2.1 節で議論した，可能の「条件」を，「力」「障害」という概念に置き換えると，「力」が内部条件，「障害」が外部条件におおむね相当する．侯瑞芬（2009）の枠組みは，中国語の 3 形式に対する記述にとどまらず，可能を表す他形式，他言語も射程としうるものになっている点で有益である．ただし，「力」と「障害」の内実に関しては侯瑞芬（2009）でも詳しく検討されていないため，2.1 節で指摘した同様の問題が生じる．侯瑞芬（2009）には，心情可能についての言及はないが，（16）の例において「そんなことを言う」という行為を不可能にしている「恥ずかしい気持ち」を，力（内部条件）とみなしても，障害（外部条件）とみなしても，“能”しか用いられないことが侯瑞芬（2009）の枠組みからは説明できない．

（16） 因 为 太 害羞 了， 所以 我 不 {能/*会/*可以}
～なので すぎる 恥ずかしい SFP（変化） したがって 私 NEG NENG/HUI/KEYI
说 这 件 事.
話す これ CL 事
「恥ずかしくて私はそんなこと言えない.」

“能”“会”“可以”を扱った研究においても，その異同を説明するための，「可能」に関わる力（条件）についての議論が十分になされていないという課題が残っている．

3. 本稿の提案：「可能」概念を構成する力に着目した分析

本稿でも，先行研究の知見を参考にし，可能に関わる力（条件）のあり方に着目して，中国語の３つの可能形式の異同を記述するという立場をとる．従来の研究と異なる点として，従来の研究では，力と障害，あるいは内部条件と外部条件というそれぞれ独立した存在として捉えられてきた力を行為の連鎖の中に位置づける．さらに複数の力の中に，動的事態の層と静的事態の層という質の異なるレベルにそれぞれ属するものがあるという見方を提案する．本稿で提案する「可能」概念を構成する力の関係を模式的に示した以下の図を基に，具体的に説明する．

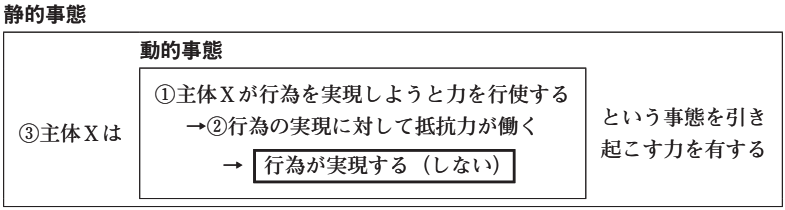

図　「可能」概念を構成する力の関係

動的事態の層は，以下のような行為の連鎖からなる．「①主体Ｘがある行為を実現しようと力を行使する」→「②その行為の実現に対して抵抗力が働く」→「①と②の力のやりとりの結果，抵抗力を克服すれば行為が実現する，抵抗力に屈すれば行為が実現しない」．この動的事態の主体Ｘは「行為主体」にあたる存在である．可能を規定する際に，「行為」と「結果」といった動的事態に関わる概念を組み込むという観点そのものは本稿独自のものではなく，張威（1998）や伊藤（2003），安本（2009）など，特に中国語の可能補語に注目した先行研究でも多く見られる．伊藤（2003:6）は，「ある動作・行為が可能であるとは，話者の想像した世界でその動作・行為が実現していること」と述べる．「話者の想像した世界で」という部分は，非現実性を表すモダリティとしての可能の性質を述べたものであるが，重要なのは，行為の（非）実現が可能を捉える上での中核になっているという点である．本稿でも「可能」概念の中核は行為の（非）実現であるという見方をとる．模式図の動的事態における「行為が実現する（しない）」という箇所が太線で囲まれているのは，この点を反映したものである．

以上が動的事態に関する説明であるが，この動的事態を包み込む形で，「③主体Ｘは動的事態を引き起こす力を有する」という静的事態が存在すると考える．この静的事態の主体Ｘは，「能力主体」にあたる存在である．本稿の枠組みに基づくと，「可能」概念を構成する力は，①行為主体が行為の実現に向けて行使する力（意志の発動や，対象に対する働きかけなど），②行為の実現に対する抵抗力（外部状況の条件や，対象の性質），③能力主体が有する力（能力主体の技能や属性）の３つに分けられる．従来の研究で「外部条件」「障害」と呼ばれてきたものがおおむね②にあたり，「内部条件」「力」と呼ばれてきたものが，①と③の２つに下位区分されることになる．

このような「可能」概念を構成する力の関係を基にして，“能”“会”“可以”の違いを，どの力から行為の（非）実現を捉えた可能を表しているのかという違いの反映と考え，以下のように規定する．

“能”　：動的事態における①の力から行為の（非）実現を捉えた可能を表す
“可以”：動的事態における②の力から行為の（非）実現を捉えた可能を表す
“会”　：動的事態の①と②のやりとりを捨象し，静的事態の③の力から行為の（非）実現を捉えた可能を表す

まず，“能”と“可以”における捉え方の違いを“他｛能/可以｝画油画．”（彼は油絵が描ける）という能力可能の例で説明する．“能”を用いた場合は「彼が油絵を描こうと力を行使し，『油絵を描く』という行為の実現を阻む抵抗力を克服することで，『油絵を描く』という行為が実現する」という意味になり，“可以”を用いた場合には，「『油絵を描く』という事態の行為を阻む抵抗力（絵を描く時間がないこと，技術的な難しさなど）が存在しないため，『油絵を描く』という行為が実現する」という意味になる．先行研究で指摘されていた，“能”の積極性，“可以”の消極性という意味特徴は，本稿の枠組みに基づくと，“能”が行為主体の力の行使という行為の実現を促す力から可能を捉えているのに対して，“可以”は行為主体の力の行使に対する抵抗力という行為の実現を阻む力から可能を捉えていることの反映と考えることができる．一方，“会”は動的事態内の力関係を捨象したものである．“会”の捉え方を“他会画油画．”（彼は油絵が描ける）という文で説明すると，「彼は，『油絵を描く』という行為を実現

するための力（油絵を描く技術があるなど）を有しているため，『油絵を描く』という行為が実現する」という意味になる．“会”が習得技能や属性を表すという記述は，動的な力関係を捨象して，③能力主体による力の所有という静的事態との関わりで可能を捉えているという特徴の反映と考えることができる．

本稿の“能”“会”“可以”に対する見方は，従来の「達成」「属性」「許容」といった特徴づけと大きくは変わらないが，本稿の枠組みに基づくと，力の関係，形式間の関係において以下のA～Dの特徴を含意することが重要である．

A. “能”と“可以”は動的事態における力に注目しているという点で共通する．
B. ②は①を前提とする．
C. ①から行為の（非）実現を捉えた場合，②の存在を含意する．
D. “能”と“会”は主体の力に注目しているという点で共通する．

これらの特徴の詳細，およびこれらの特徴が“能”“会”“可以”の異同とどのように関わってくるのかについては，以下の4節で能力可能，状況可能，および許可可能を表す例をそれぞれ詳しく検討する中で見ていく．

4. 可能を構成する力から見た“能”“会”“可以”

4.1 能力可能

能力可能は，(17)，(18) が示すように，基本的には“能”“会”“可以”のいずれの形式でも表すことができる．

(17) 他 {能／会／可以} 游泳.
彼 NENG/HUI/KEYI 泳ぐ
「彼は泳げる.」

(18) 他 {能／会／可以} 说 英语.
彼 NENG/HUI/KEYI 話す 英語
「彼は英語を話すことができる.」

ただし，一定の条件下では，3つの形式でふるまいの違いを見せる．1つは，動的な力関係が読み込めない能力を述べる場合であり，2.2節で紹介し

た，“自然に習得され，特別な努力なしにおこなうことができる動作”を表す（19）のような例である．

（19） 老鼠 生来 会 打洞.
ネズミ 生まれつき HUI 穴を掘る
「ネズミは生まれながらにして穴を掘ることができる.」

（19）で“能”“可以”を用いると不自然になるが，これは（19）の主眼が，ネズミの生物的な不変的特徴を述べることにあり，力の行使とそれに対する抵抗力とのやりとりの結果，行為が実現する（しない）といった動的な力関係を問題にしていないからである．「A.“能”と“可以”は動的事態における力に注目しているという点で共通する」という特徴が“能”と“可以”の使用を制限しているのである．

逆に，能力可能でも動的な力関係を無視できず，いずれかの形式の使用が制限される例を 2 つ見る．1 つは，2.2 節で指摘した，補語などと共起した場合である．2.2 節では方向補語（(20a)）の例だけを見たが，ほかにも，行為の結果を限定する結果補語（(20b)），行為の様態を限定する様態補語（(20c)），行為の達成量を表す数量補語（(20d)）といった補語成分がある．さらに，中国語で“状语”と呼ばれる副詞的な連用修飾成分（(20e)），介詞句（前置詞句）（(21f)）と共起した例も同種の例である．

（20）a．他 {能/*会/可以} 写 出来 汉字.
彼 NENG/HUI/KEYI 書く-出て来る 漢字
「彼は漢字を書きだせる.」

b．他 {能/*会/可以} 把 衬衫 洗 干净 .
彼 NENG/HUI/KEYI ～を ワイシャツ 洗う-きれい
「彼はワイシャツをきれいに洗える.」

c．这 件 衣服，我 {能/*会/可以} 洗 得 干净 .
これ CL 服 私 NENG/HUI/KEYI 洗う SP きれい
「この服を，私はきれいに洗える.」

d．他 {能/*会/可以} 游 500m.
彼　NENG/HUI/KEYI　泳ぐ　500m
「彼は500m泳げる.」

e．他 {能/??会/可以} 流利地 说 英语.
彼　NENG/HUI/KEYI　流暢　SP　話す　英語
「彼は流暢に英語が話せる.」

f．他 {能/*会/可以} 在 海里 游泳.
彼　NENG/HUI/KEYI　～で　海-中　泳ぐ
「彼は海で泳げる.」

いずれの成分も“能”と“可以”とは自然に共起するが，“会”とは共起しにくい．従来の研究ではこれらは“能”の「達成」の意味特徴と関わる現象として捉えられてきた．しかし，そのような分析では，「達成」という意味特徴を持たない“可以”も自然に共起すること，同じように能力の程度が高いことを表す（21）や（22）の例で“会”が自然に成立することが説明しにくいという問題があった．

(21) a．四岁 的 孩子 会 写 三千 个 汉字.
四歳　SP　子供　HUI　書く　三千　CL　漢字
「4歳の子供は三千の漢字が書ける.」

b．外国 老板 看中 了 这 位 小姐 的 一 个 优点：会 说 一口
外国　社長　気に入る　PERF　これ　CL　娘　SP　一　CL　長所　HUI　話す　生粋の
流利 的 英语.
流暢　SP　英語
「外国の社長はその娘のある長所を気に入った．それは流暢な英語を話せるという点である.」　（鲁晓琨 2004: 153）

(22) a．他 会 闭 着 眼 打 字.
彼　HUI　閉じる　CON　目　打つ　字
「彼は眼を閉じてタイプすることができる.」

b．他 会 倒立 着 画 油画.
彼 HUI 逆立ちする CON 描く 油絵
「彼は逆立ちしたまま油絵が描ける.」

(20) と (21), (22) の違いは, (20) で共起している成分はいずれも行為を表す動詞句と直接関係を結び,「行為の現れ方を限定する成分」になっているのに対して, (21) はそうはなっていないという点にある. 補語成分はいずれも行為の結果や様態, 達成量という点から行為の現れ方を限定しており, “流利地”(流暢に) という状語, “在海里”(海で) という介詞句も行為の様態, 場所を限定することで, 行為の現れ方を限定している. 一方 (21) に現れる “三千个”(三千個), “一口流利”(とても流暢) が直接関係を結んでいるのは “汉字”(漢字), “英语”(英語) という目的語であり, 行為を表す動詞とは直接関係を結んでいない. (22) の “闭着眼”(目を閉じたまま), “倒立着”(逆立ちしながら) も, 主語の状態を表し, 主語と叙述関係を結んでいる成分である. 黄麗華 (1995) が挙げる以下の (23) の例も “一千多”(1000 あまり) という数量が出ていることが問題なのではなく, これが “一小时”(一時間に) という行為が現れる時間幅を限定する成分と共起しているために “会” の使用が制限されているのである. (21a) の “会” が自然であることから, 数量でも目的語と直接意味関係を結んでいる場合には “会” の使用は制限されないと考えるべきである.

(23) 张三 一小时 {能/*会} 打 一千多 字.
張三 一時間 NENG/HUI 打つ 千余り 字
「張三は 1 時間に 1000 字あまり打てる.」

「達成」という観点からは説明しにくかった (20) と (21), (22) の違いが, 共起する成分が行為の現れ方を限定している成分か否かという違いにあることがわかった. 行為の現れ方を限定する成分と共起すると “会” が用いられなくなるのは, これらの成分によって,「行為の様態」「行為の結果のあり様」といった行為の動的な側面が際立つことになるためであると考えられる. これによって, 動的事態の力関係を捨象した “会” が用いられにくくなり, 動的事態の力関係から行為の (非) 実現を捉えた “能” と “可以” が用いられるのである. ここにも,「A. “能” と “可以” は動的事態における力に注目しているという点で共通する」という特徴が表れている.

動的な力関係が関わるもう１つの例として，“能”しか使えない例を見る．それが，2.1 節，2.2 節でも指摘した，行為主体の心情という条件によって行為が（不）可能であることを表す心情可能の例（(24)）である．

(24) a．因为　太　害羞　了，　所以　我 不 {能/＊会/＊可以}
～なので　すぎる 恥ずかしい　SFP（変化）したがって 私　NEG　NENG/HUI/KEYI
说　这　件　事.
話す　これ　CL　事
「恥ずかしくて私にはそんなこと言えない.」

b．因为　太　害怕　了，　所以　我 不 {能/＊会/＊可以}
～なので　すぎる 怖い　SFP（変化）したがって 私　NEG　NENG/HUI/KEYI
看　那　部　电影.
見る　それ　CL　映画
「怖くて私にはその映画が見られない.」

①行為主体の力の行使と③能力主体が有する力を内部条件と見なす本稿の枠組みでは，心情可能は，①行為主体の力の行使という内部条件による可能を表す「能力可能」の一種ということになる[7]．心情可能の条件の特異な点は，①行為主体の力の行使と切り離せない点である．(24) の文は，「(そんなことを) 言おうとする」「(その映画を) 見ようとする」という意志の発動という力の行使自体が成立しないことを表している．もしパラフレーズするならば，「私 (行為主体) がそんなことを言おうとしても，私が言おうと力を行使するための心情的条件が整ってないので，『言う』という行為が実現しない」，「私（行為主体）がその映画を見ようとしても，私が見ようと力を行使するための心情的条件が整ってないので，『見る』という行為が実現しない」といった意味になるだろう．つまり，心情可能は，①行為主体が行使しようとする意志の力そのものが焦点になっている可能表現であると言える．したがって，この場合には，①行為主体の力の行使から行為の（非）実現を捉えた“能”のみが使われるのである．

ここまでの能力可能の観察から，“能”と“可以”が関わる動的事態の力と“会”が関わる静的事態の力の区別，同じ内部条件でも①行為主体の力の行使と③能力主体が有する力の区別が重要であることが示された．

4.2 状況可能，許可可能

つづいて，状況可能と許可可能をあわせて見る．本稿の枠組みでは，①行為主体の力の行使，③能力主体が有する力以外の条件はすべて外部条件とみなされる．(25) で行為を可能とする条件「用事がないこと」「暑いこと」「足の傷(が治ったこと)」はいずれも外部条件であり，(25) は状況可能を表す例である．(26) に関わっていると想定される「許可主体の力」「規範」といった条件も外部条件であり，(26) はそれによって許可，禁止を表す許可可能の例である．状況可能と許可可能は 3 つの可能形式が同じ分布を示し，“能”と“可以”は表せるが，“会”はこの 2 つの意味を表せない．

(25) a．今天 没 有 事，我 {能/*会/可以} 参加 那 个 会议.
今日 NEG ある 事 私 NENG/HUI/KEYI 参加する それ CL 会議
「今日は用事がないので，その会議に参加できる.」

b．天气 热 了，{能/*会/可以} 游泳 了.
天気 暑い PERF NENG/HUI/KEYI 泳ぐ SFP（変化）
「暑くなってきたので，泳げる.」

c．他 腿 伤 治好 了，{能/*会/可以} 走路 了.
彼 足 傷 治る-良い PERF NENG/HUI/KEYI 歩く SFP（変化）
「彼は足が良くなって，歩けるようになった.」

(26) a．现在 我 {能/*会/可以} 说 两 句 吗？
今 私 NENG/HUI/KEYI 話す いくつか CL SFP（疑問）
「今ちょっと喋ってもいいですか.」

b．我 {能/*会/可以} 进来 吗？
私 NENG/HUI/KEYI 入る-来る SFP（疑問）
「入ってもいいですか.」

van der Auwera (1998) は，「許可」という deontic modality を状況可能の特殊なケースとして見ており，黄麗華 (1995) も“可以”が中心的に表すとされてきた許可の意味は，本稿で言うところの状況可能の意味から生じている

意味と見ている．いずれも状況可能と許可可能の共通性を指摘したものである．状況可能と許可可能の共通点を考えると，両者ともに「2つ（以上）の力の存在が前提となり，その力関係の結果，行為が実現する/実現しないことを表す可能」であるという特徴がある．例えば，（25a）で「私が会議に参加する」ことを可能にしている力を考えると，「明日用事がないこと」という外部条件の抵抗力（の不在）が関わっていることは明らかであるが，それは，「会議に参加する私」という行為主体の力の行使が前提となっている．3節で述べた「B．②の力は①の力を前提とする」という特徴である．行為の連鎖の中間にある②抵抗力は，①行為主体の力の行使あっての「抵抗」力であり，独立して存在しえないという関係にある．（25a）は，この2つの力の相互作用によって，「私が会議に参加する」という行為が実現可能であることを表している．許可可能も同様であり，（26a）で示される「喋ることを許可する主体の力や規範」という外部条件の抵抗力は，「喋る」行為主体である「私」の「喋ろうとする」力の行使が前提となってはじめて認められるものである．

このような共通性を持つ状況可能と許可可能において，“能”と“可以”しか用いられないことの理由を考える．抵抗力の存在に焦点がある状況可能，許可可能において，②の力（抵抗力）から行為の（非）実現を捉えた“可以”が使われることは自然に理解できる．問題になるのは，①行為主体の力の行使から行為の（非）実現を捉えた“能”をなぜ用いることができるのかであるが，これには，「C.①から行為の（非）実現を捉えた場合，②の存在を含意する」という特徴が関わる．②は，①を出発点とする行為連鎖の中間にあるため，①から行為の（非）実現を捉えると，必然的に②の力の存在も含意することになる．したがって，抵抗力によって，（不）可能になることを表す状況可能，許可可能も“能”で表すことができるのである．それに対して，“会”は動的事態における力のやりとりを捨象した形式であるため，状況可能，許可可能を表すことができないのである．

「2つ（以上）の力の存在が前提となり，その力関係の結果，事態が実現する/実現しないことを表す可能」という考え方は，（27）のような例にもあてはまる．

（27）a．这　架　钢琴　{能/*会/可以}　弹.
　　これ　CL　ピアノ　NENG/HUI/KEYI　弾く
　　「このピアノは弾くことができる.」

b．芹菜 叶子 也 {能/*会/可以} 吃.
セロリ 葉 も NENG/HUI/KEYI 食べる
「セロリは葉も食べられる.」 (吕叔湘 1999: 414)

(27) は，主語に現れている「このピアノ」「セロリ」が行為主体ではなく，行為の対象であり，その対象の性質を述べているという構文的・意味的特徴を持つ．侯瑞芬（2009）はこのような例を「モノの“能力”」として能力可能の一種と見ているが，能力可能であるならばなぜ，“会”が用いられないのかという疑問が生じる．本稿は，(27) も状況可能の一種であると考える．(27a）で「ピアノを弾く」という行為を可能にしているのは，①ピアノを弾く行為主体の力と，②「このピアノは壊れていない」「このピアノは子供でも扱える小さいサイズである」といったピアノ側の力である．(27a）は，行為主体を背景化し，「ピアノ」の力を特に問題にしているからこそ，「このピアノ」（“这架钢琴”）が主語に現れている．この場合，②の力の存在が意味解釈上，必須になるので，“会”を用いることができないのである．

ここまでの状況可能（許可可能）に対する考察を踏まえ，4.1 節の能力可能に対する考察とあわせて，本稿の枠組みから見た能力可能と状況可能について整理する．「ピアノが弾ける」ことを述べるときに必ず「ピアノ」の力を考えなければならないわけではなく，ピアノを弾く行為主体の力を中心にして述べることもできる．その場合には，行為主体（能力主体）を主語にした (28) のような能力可能が用いられることになるが，このようにピアノの力やその他の抵抗力を問題にしなくてもよいときには，“能”“会”“可以”いずれの形式でも表すことができる．

(28) 他 {能/会/可以} 弹 钢琴.
彼 NENG/HUI/KEYI 弾く ピアノ
「彼はピアノが弾ける.」

ここで重要なのは，(28) の文は，あくまで「抵抗力を問題にしなくても」解釈できる文であり，「可能」概念を構成する力として「抵抗力が存在する」ことを否定しているわけではないという点である．3 節で能力可能を表す“他 {能/可以} 画油画.”（彼は油絵が描ける）の“能”と“可以”が用いられたときの意味を説明する際，“能”は「彼が油絵を描こうと力を行使し，『油絵を

描く』という行為の実現を阻む抵抗力を克服することで，『油絵を描く』という行為が実現する」という意味になり，“可以”を用いた場合には，「『油絵を描く』という行為を阻む抵抗力が存在しないため，『油絵を描く』という行為が実現する」という意味になると述べた．このように“能”や“可以”を用いた場合には能力可能を表す場合でも，抵抗力が「油絵を描く」行為主体とは別に想定されていることになる．ただし，能力可能ではこのような抵抗力の存在が特定されておらず，またその存在を想定しなくても解釈することができる．抵抗力を想定せずとも「彼の属性によって『油絵を描く』という事態が実現する」という捉え方は可能であり，そしてそれができるからこそ“会”も用いることができていたのである．しかし，状況可能（許可可能）は，意味解釈上①行為主体の力の行使と②外部の一時的条件や事物の力，許可主体の力・規範などの抵抗力という２つ（以上）の力の存在が指定されているので，“会”を用いることができないのである．つまり，本稿の枠組みでは，「どのような力（条件）が関わっているか」という視点から能力可能と状況可能（許可可能）の区別を捉えているのではなく，「どのような力が意味解釈において指定されているか」という視点から捉えているということである．このような視点からこれまでの考察を整理したのが表２である．本稿の枠組みでは，能力可能は「力の指定がない，あるいは単一種類の力の指定がある可能」であり，状況可能と許可可能は「複数種類の力の指定がある可能」であると捉えなおされる．

表２　“能”“会”“可以”の分布

意味	能力可能			状況可能	許可可能
意味解釈上指定される「力」	指定なし	③能力主体の力	①行為主体の心情の力	①行為主体の力 ②一時的条件の力/行為主体以外の事物の力	①行為主体の力 ②許可主体の力・規範
可以	○	×	×	○	○
能	○	×	○	○	○
会	○	○	×	×	×

5.　さらなる現象の説明

ここまでevent modalityに属する能力可能，状況可能，許可可能における“能”“会”“可以”の基本的な意味分布と一定の条件下で特定の形式の使用が制限される現象をとりあげ，それらが「可能」概念を構成する力のあり方に着

目することで説明できることを見た．最後にこの5節で，程度副詞と共起した場合の“能”と“会”の意味解釈の違いと，“可以”の「メタ言語的用法」をとりあげ，本稿の枠組みが，意味解釈の違いや，event modality以外の用法を説明する上でも有効であることを示す．

まず，“能”と“会”が“很”（とても），“真”（本当に），“特别”（特に）などの程度の高さを表す副詞と共起した場合の意味解釈の違いについて見る．“能”がこれらの程度副詞と共起した場合には，「行為の量」の多さを強調する意味になり，“会”は「行為の質」の高さを強調する意味になるということが黄麗華（1995），鲁晓琨（2004），侯瑞芬（2009）など多くの先行研究で指摘されている．“能”を用いた（29）は「買い物をする行為の量（頻度）の多さ」「食べる量の多さ」を表しており，“会”を用いた（30）は「買い物の技術の質の高さ」「食べ方の質の高さ」を表している．

(29) a．张三 特别 能 买 东西.
張三 特に NENG 買う もの
「彼はたくさん買い物をする．」

b．他 很 能 吃.
彼 とても NENG 食べる
「彼はよく食べる．」

(30) a．张三 特别 会 买 东西.
張三 特に HUI 買う もの
「張三は買い物上手だ．」

b．他 很 会 吃.
彼 とても HUI 食べる
「彼はグルメだ．」

行為の量か質かという意味解釈の対立は比較的生産的であり，（31）でも同種の解釈の違い現れる．

(31)　“很能说”（よく喋る）—“很会说”（弁が立つ）
“很能干”（よく働く）—“很会干”（要領がいい）
“很能喝酒”（酒豪だ）—“很会喝酒”（利き酒ができる）

この“能”と“会”の意味解釈の違いも，“能”が属する動的事態と“会”が属する静的事態という違いを踏まえれば自然に理解できる．能力可能に“很”“真”“特別”などの副詞が共起した場合の意味とは，簡単に言うと「主体がある行為ができることの程度が高い」ということである．その程度の高さを，①行為主体の力の行使のあり方に求めた解釈がいわゆる「行為の量」を強調した解釈である．「行為の量」とは，可変的で，力の行使のあり方に左右される動的なものである．例えば，「昨日はたくさん買い物をして，今日はあまり買い物をしない」「朝食はたくさん食べて，昼食はあまり食べない」という行為量の変化は力の行使のあり方次第で容易に起こる．一方，程度の高さを③能力主体の力に求めた解釈がいわゆる「行為の質」を強調した解釈である．「行為の質」は，力の行使のあり方というよりも，能力主体が恒常的に持つ力に依存する．例えば，「張三は昨日は買い物上手で，今日は買い物上手でない」「彼は朝食ではグルメで，昼食ではそうでない」という質の変化は通常考えられない．このように，行為の量か質かという対立は，①行為主体の力の行使のあり方か③能力主体の力のあり方かという対立から導くことができ，本稿の枠組みから自然に説明できる．

2つ目の事例として，“可以”が独占的に現れる用法を見る．それは，(32)のような例である．

(32)　中国 的 史家，往往　是“治　史书　而　非　治　历史”，
中国　SP　歴史家　往々にして　COP　治める　史書　しかし　NEG　治める　歴史
他们 可以 是　十分　优秀 的　版本　专家，却　不　能　从
彼ら　KEYI　COP　とても　優秀　SP　版本　専門家　しかし　NEG　NENG　～から
整体上　解释　历史.
全体-上　解釈する　歴史
「中国の歴史家は往々にして“史書を研究し歴史を研究しない者”である．彼らはとても優秀な版本の専門家かもしれないが，歴史を全体的に解釈することができない.」
(CCLコーパス)

(32) は,「彼らが優秀な版本の専門家であることが可能だ」ということを表しているのではなく,「彼らが優秀な版本の専門家であると『言える』,『認められる』」という事柄の内容について言及したり,認めたりする言語行為に関する可能を表している.このような例は中国語の“可以”だけに見られるものではなく,英語のcanにも同様の例が見られる.Sweetser (1990) は,(33) の文が (34) のようにパラフレーズできることを指摘し,これをdynamic modalityやdeontic modalityとも,epistemic modalityとも区別して,言語行為に関わる「メタ言語的 (metalinguistic) 用法」として位置づけている.

(33) “OK, Peking can be Beijing; but you can't use 'Praha' for Prague.”
(34) OK, you can refer to Peking as Beijing...
(澤田治美訳 2000: 100−101)

(32) の類例として (35), (36) が挙げられる.(35), (36) では“说”(言う),“算”(みなす) といった言語行為が動詞として顕在しているが,“说”“算”の主体は事態内の参与者ではなく,話し手 (書き手) を代表する人々一般である.

(35) 他 这 回 的 成功,可以 说 他 是 尽量 地 发挥 了 自己 的
彼 これ CL SP 成功 KEYI 言う 彼 COP 存分に SP 発揮する PERF 自分 SP
本领 而 得来 的 成果.
本領 そして 得る-来る SP 成果
「彼の今回の成功は本領を遺憾なく発揮して得た成果である.」
(『中日大辞典』)

(36) 中国 散文 历史 的 悠久 大概 可以 算 世界第一.
中国 散文 歴史 SP 悠久 おそらく KEYI みなす 世界一
「中国散文の歴史の悠久はおそらく世界一である.」(CCLコーパス)

(32), (35), (36) のようなメタ言語的用法では,「言う,認めるのに差支えない」という抵抗力の不在だけを表す“可以”のみが使用可能である.メタ言語的用法では,可能たらしめる主体 (行為主体,能力主体) が不在であるため,「D.“能”と“会”は主体の力に注目しているという点で共通する」とい

う特徴を持つ“能”と“会”は使えないのである.

以上，簡単ではあるが，“能”“会”“可以”の基本的な意味分布の違いだけでなく，意味解釈上の違いやevent modalityとは異なる用法も本稿の枠組みの説明の射程に入りうるものであることを見た.

6. おわりに

本稿では，「可能」概念を構成する力に着目し，従来単層的に捉えられていた「条件/力」を，動的な行為の連鎖に関わる力と，能力主体が有する力という静的な力に分けて整理した．これによって，先行研究の観点からは説明がしにくかった，行為の現れ方を限定する成分と共起する例，心情可能を表す例における“能”“会”“可以”のふるまいが適切に捉えられることを示した．さらに，能力可能と状況可能（許可可能）の区別を，「どのような力（条件）が関わっているか」という視点で捉えるのではなく，「どのような力が意味解釈において指定されているか」という視点で捉えるという新しい見方を提案した．これによって，能力可能は，「力の指定がない，あるいは単一種類の力の指定がある可能」，状況可能と許可可能は「複数種類の力の指定がある可能」という関係で捉えなおされる可能性があることを示した.

注

1　本稿は，筆者が2013年度に筑波大学に提出した博士論文『日本語と中国語の可能・難易表現に関する認知論的・語用論的研究』の一部に加筆・修正を行ったものである.

2　“能”“会”“可以”の使用範囲については，地域差があることが先行研究で指摘されている（讃井1996，Li, Renzhi 2004）．本稿が議論の対象としているのは，中国語標準語“普通话”であり，論文中で「中国語」という場合には，この“普通话”のことを指す.

3　中国語では本稿が考察対象としている，助動詞が可能の意味を担うタイプ（助動詞型）のほか，動詞に「補語」と呼ばれる副詞的成分が後置され，“V（erb）＋｛得/不｝＋C（omplement）”という形で可能の意味を表すタイプがある（補語型）．したがって，実際には，中国語ではこの補語型も加えた4種の可能表現が競合関係にあり，それぞれ意味のすみわけがなされていることになる.

4　本稿で用いるグロスの略記は以下の通り．CL：量詞（類別詞）（classifier），CON：持続アスペクト（continuous aspect），COP：コピュラ（copula），NEG：否定辞（negative marker），PERF：完了アスペクト（perfect aspect），SFP：文末助詞（sentence-final particle），SP：構造助詞（structure particle）

5 初出で出典の記載がない例文は筆者による作例である．作例の中国語については，中国語母語話者のチェックを受けている．ただし，当然のことながら，本稿の記述に不備，誤りがあればすべて筆者の責任である．

6 鲁晓琨（2004）では，モダリティの分類に対応させて形式の意味を記述している．中国語原文にある“会 1”はdynamic modalityを表す“会”のことを指し，“可以 1”と“可以 2”はそれぞれdynamic modalityとdeontic modalityを表す“可以”のことを指す．

7 本稿は，Palmer（2001）のモダリティの分類を出発点としているので，心情可能を能力可能の一部として扱っているが，渋谷（1993）は，日本語の方言で能力可能と心情可能で形式の使い分けが見られることから，心情可能を能力可能と別に独立した意味として認定している．

参照文献

相原茂・木村英樹・杉村博文・中川正之（1987)『中国語入門Q & A101』大修館書店.

荒川清秀（1986)「文における主体的な要素－能願動詞」『中国語』3 月号, pp.4－6.大修館書店.

伊藤さとみ（2003)「中国語の可能補語」琉球大学法文学部『日本東洋文化論集：琉球大学法文学部紀要』9, pp.1－16.

黄麗華（1995)「中国語の可能表現「能」「会」「可以」」東京都立大学国語学研究室『日本語研究』15, pp.78－87.

讃井唯允（1996)「助動詞（能・会・可以)」『中国語』10 月号, pp.56－59.内山書店.

渋谷勝己（1993)「日本語可能表現の諸相と発展」大阪大学文学部『大阪大学文学部紀要』33（1）, pp.1－262.

渋谷勝己（2005)「日本語可能形式にみる文法化の諸相」『日本語の研究』1（3）, pp.32－46.

張威（1998)『結果可能表現の研究　日本語・中国語対照研究の立場から』くろしお出版.

安本真弓（2009)『現代中国語における可能表現の意味分析－可能補語を中心に』白帝社

渡边丽玲（2000)〈助动词“能”与“会”的句法语义分析〉陆险明主编《面临新世纪挑战的现代汉语语法研究》pp.476－486.山东教育出版社.

侯瑞芬（2009)〈从力量与障碍看现代汉语情态动词“可以”“能”“会”〉北京大学汉语语言学研究中心《语言学论丛》第四十辑pp.270－298.

陆庆和（2006)《实用对外汉语教学语法》北京大学出版社.

鲁晓琨（2004)《现代汉语基本助动词语义研究》中国社会科学出版社.

吕叔湘（1999)《现代汉语八百词增订版》商务印书店.

Bybee, Joan, Rever Perkins, and William Pagliuca. (1994) *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. Chicago: The University of Chicago Press.

Palmer, Frank. R. (2001) *Mood and Modality*, *2nd ed*. Cambridge: Cambridge University Press.

Sweetser, Eve E. (1990) *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.（澤田治美訳(2000)『認知意味論の展開－語源学から語用論まで－』研究社.）

van der Auwera, Johan and Viladimir A. Plungian. (1998) Modality's Semantic Map. *Linguistic Typology* 2(1), pp.79-124.

辞書・コーパス

『中日大辞典（増訂第二版）』大修館書店

CCL コーパス：『北京大学中国語言学研究中心現代漢語語料庫』